鳥取県立厚生病院

すずかけ

第48号　平成29年10月17日

マルチスライスCT装置の更新	1
健康公開講座開催報告 6月11日（日）開催「がんの予防と治療」 9月24日（日）開催「がんと共に生きる ～最期まで自分らしく過ごすために～」	2-3
オープンホスピタル2017開催	4-5
「この病院で育ちたい」と思われる 病院づくりのために	6
放射線診断専門医になりました	6
認定看護師の紹介＜糖尿病看護認定看護師＞	6
高校生一日看護師体験事業 「体験！実感！ナースの仕事」	7
鳥取看護大学実習開始	7
ワークライフバランス 「カンゴザウルス賞」を受賞しました	7
お気軽にご相談ください	8
新任医師、退職者の紹介	8

マルチスライスＣＴ装置の更新

▲マルチスライスCT装置

平成29年8月、当院のCT装置を320列マルチスライス装置に更新しました。

この装置の一番の特長は、1回転で16cmという広範囲の撮影が可能となる320列面検出器を搭載し、一度に広範囲を短時間で検査できることです。撮影時間が短くなると放射線被ばく等も低減し、検査を受けられる方の負担も少なくなります。

CT装置は1975年に日本で最初の装置が稼働しました。この装置は頭部専用機で、頭部全体を撮影するのに約30分かかっていました。その後開発が急速に進み、1986年には現在の主流であるヘリカルCT装置が開発され、1998年には4列マルチスライスCTが稼働、320列マルチスライスCT装置は現在の最上位機種となります。

厚生病院においてもシングルCTから16列マルチスライスCT、今回320列マルチスライスへと時代とともに更新してきました。

1回転で16cmの範囲は例としては頭部全体、心臓、肝臓等をそれぞれ一度に撮影できます。特に小児領域では胸部・腹部が1回転で撮影可能となり、撮影時間は最短0．35秒、鎮静をしなくても検査ができます。

320列マルチスライスCT装置の導入により、今までの形態診断に「機能診断」や「動態診断」が付加され、より一層CT検査の適応が広がり、高精度の画像情報が提供でき、画像診断に寄与できるものと考えます。

中央放射線室長　森里昭典

心臓の血管画像

肺の血管と気管支画像

健康公開講座開催報告

６月１１日（日）開催　「がんの予防と治療」

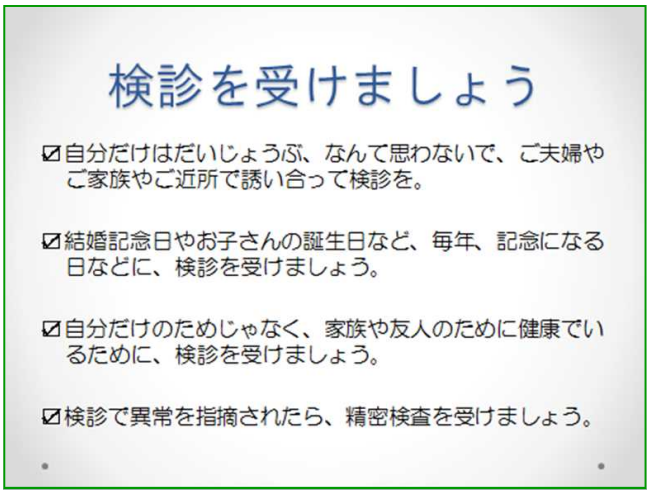
◆講演1「胃がん・大腸がんの予防と治療」

消化器内科　野口直哉部長

高齢化社会の日本でがんはもっとも多い死亡原因です。がんを部位別にすると、胃がんと大腸がんは、肺がんに次いで3位と2位を占めています。

がんになるのを避けるのはとても難しいことですが、塩分、喫煙を控えピロリ菌を除去して野菜の多い食事を摂るような生活習慣での一次予防、早期発見・早期治療による二次予防、がんの再発や転移を防ぐための治療等の三次予防で、がんで死亡することを避けることは可能です。

胃がんや大腸がんになっても、それが原因で死亡しないためにはがんの早期発見、早期治療がもっとも大事です。



◆講演2「肺がんの予防と治療」

呼吸器内科　北谷新医長

肺がんの原因として喫煙の関連は明らかとされており、受動喫煙も含めた対策が重要です。また死亡率が1位であり、特に高齢男性での罹患が問題となっています。

治療は早期に発見し、切除する手術が一番予後がよいですが、進行がんでは抗がん剤や放射線などの治療が中心となります。最近では分子標的薬や免疫療法の適用などにより、進行がんでも予後を伸ばし始めていますが、まだまだ低い現状があります。

検診で発見される肺がんは、それ以外と比べて早期の状態が多く、治療成績もよいことが分かっていますので、毎年受けるようにしましょう。

◆講演3「乳がんの予防と治療」

胸部外科　大田里香子医師

乳がんは、女性のかかりやすいがん第1位で年々増えており、現在では女性の12人に1人が乳がんと診断されています。しかし、適切な治療を行えば治ることの多いがんでもあります。早期発見すれば、さらに治癒する率は高くなります。

乳がんの予防法としてできることは、禁煙し、飲酒を控えめにし、体重管理をし、適度な運動をすることです。

早期発見のためにできることは、2年に1度のマンモグラフィー検診と月に1回の自己触診です。マンモグラフィーで、触ってもわからない乳がんが見つかることもありますが、検診と検診の間に大きくなるスピードの速い乳がんもあり、毎月自分の乳房を触って、変わりがないことを確認することが大切です。

検診で精密検査が必要といわれても、そのうち実際乳がんと診断される人は数％で、良性（がんでない）のしこりも多く存在します。また、少し発見が遅くても、できる治療はたくさんあります。

精密検査が必要といわれたら、また、自己触診で先月との違いに気づいたら、慌てず、無視せず、病院を受診してください。

９月２４日（日）開催

「がんと共に生きる～最期まで自分らしく過ごすために～」

◆講演1「人生の最後を在宅で過ごす」

訪問看護ステーションゆりはま

管理者　平田すが子氏

高齢化社会が進み、2025年には国民の4人に1人が75歳以上の高齢者となり、医療費がふくらむことが予測されています。国は医療・介護のシステムを『病院から暮らしの場へ』『治すことを中心にした病院完結型の医療から、暮らしの中で病と共に歩む、治し・支える医療へ』方向転換していきます。

地域の医療資源のひとつである『訪問看護』や相談窓口である『地域包括支援センター』等を知っていただき、『暮らしの場所、住み慣れた家で最期を迎える』という終末期の選択肢もあることを考えていただきたいと思います。

また、人の気持ちは変わるものですので、そのときどきの気持ちを素直にまわりの方へ伝えていくことをお勧めします。

◆講演2

「知っておきたい終末期の医療について」

内科　佐藤徹部長

人は必ず終末期を迎えます。終末期をどう過ごすか、特に終末期にどのような治療・ケアを受けたいかについては、その他の場合の医療の選択よりも、その人の価値観が選択に強い影響を与えます。また延命処置についての知識も選択する上で必要となります。

終末期の医療の選択には本人の意思を尊重したくても家族が選択をせざるを得ない場合もあります。あらかじめ自分でも考え、家族、ケア担当者と話し合いができていれば自分にとっても家族にとってもよりよい終末期を送れる可能性が大きくなると思います。

◆講演3

「最期まで自分らしく生きるために
今からできること」

佐々木美鈴緩和ケア認定看護師

私たちは誰もが老いや病気、そして死を避けることができません。しかし「死」について語ることは避けられる傾向にあります。

みなさんは日頃から、生きること、病気になった時のこと、高齢・認知症など終末期になった時のことを自分で考えたり、ご家族と話し合ったことはありますか？

頭では理解していても、自分のこととして捉えていくのは難しいものです。自分の死について考えることは、自分の生き方を考えることでもあります。もしものことが起こり、医療の選択を迫られた時、あらかじめ本人の意思を家族や医療者が把握していれば、本人・家族も望む最期の時間を過ごすことができます。

人によって様々な生き方があるように、その人の人生の最期の捉え方も様々です。今の自分を振り返り、これからの生き方について考えてみましょう。そして悩んだときはひとりで悩まず、抱え込まず、ぜひがん相談支援センターに相談してください。

オープンホスピタル ２０１７ 開催

開会式

「医療の現場を見て触れて感じてみよう」をテーマに、オープンホスピタルを7月22日に開催しました。

初めてのイベントでもあり手探りのなか、看護系・医療技術系を中心に体験型の見学会を行いました。

対象は、中部地区にある看護大学・看護専門学校生および高校生。午前の部は看護系学生を中心に、小児・周産期、手術室、集中治療室、リハビリテーション室、DMATの5ブースを設け、通常の実習ではできない模擬出産体験や手術室での器械出し、集中治療室での心肺蘇生等を体験・見学。午後の部は高校生を対象に、進路決定の参考となるよう医療技術系を中心に8ブースを見学・体験してもらいました。各ブースとも参加者に年齢の近い入職5年以内の職員が対応・説明し、和やかな雰囲気で進められました。

手術室器械出し

模擬出産

また、厚生病院の特徴である屋上ヘリポートと感染症病棟の見学も企画しました。

蒸し暑いなかでの開催となりましたが、59名の参加者が元気よく見学されていたのがとても印象的でした。イベントを担当した職員も、いきいきと笑顔で対応しており心強く感じております。

今後も厚生病院の取り組みを知っていただくため情報発信を継続していきたいと思います。

参加された方や担当したスタッフの笑顔が絶えない一日となりました。

私たちと一緒に働く
未来のあなたを
おまちしております。

オープンホスピタル実行委員
医療技術局副局長　森里昭典

「この病院で育ちたい」と思われる病院づくりのために

6月15日より臨床研修・教育センターが組織化されました。

センター長の紙谷秀規（副院長・脳神経外科部長）、副センター長の大野原良昌（産婦人科部長）の二人三脚で主に臨床研修医の教育、リクルートを担当します。さらにコメディカル人材確保のための教育環境整備にも着手しています。

ランチタイムセミナー

第2、第4金曜日の12時30分からはランチタイムセミナーと称して順次当院医師による教育レクチャーを行っており、大好評です。オープンセミナーとして近隣医療機関にもご案内しています。

現在当院の臨床研修医は2名、研修指導医は38名在籍しています。来期にはさらに多くの臨床研修医の入職を予定しています。

将来の地域医療を担う逸材を発掘し大きく育てることをモットーにし、学生から「この病院で育ちたい」と思われる病院づくりの一役を担うセンターとなることを目指しています。

臨床研修・教育センター長　紙谷秀規

放射線診断専門医になりました

放射線科副医長
小谷美香

厚生病院には2名の放射線科医が常勤しており、CT、MRI、核医学画像の読影を行っています。放射線科医には他科医師と同様に専門医資格があり、医師になって8年目で受験資格が与えられ、筆記試験と口頭試問を受けて合格すれば、診断専門医を名乗ることができます。

今回、皆様のご協力と応援の元、無事に診断専門医に合格しましたので、日々の読影業務にもさらに力を入れて励んでいきたいと思います。

認定看護師の紹介＜糖尿病看護認定看護師＞

糖尿病看護認定看護師
伊山由里子

今や糖尿病は世界的な病気となっています。慢性疾患である糖尿病は生活習慣が大きく影響しており、治療にあたっては生活習慣の変更を余儀なくされます。しかし、長年培われた生活習慣は簡単に変更できるものではありません。

私たち糖尿病看護を専門とする看護師は糖尿病患者様が自ら持つ力を信じ、患者様自身が自分の体を労わり、気にかけることができ、積極的に治療に参加することができるように支援を行います。

高校生一日看護師体験事業「体験！実感！ナースの仕事」

8月10日(木)、5校から26名の高校3年生が参加しました。

“看護をよりリアルに体験！”をコンセプトに、病棟、手術室、救急外来、分娩室で見学・実習を行いました。看護職という自分の将来像を考える貴重な機会となったようです。

看護への関心や、職業としての社会的認知度が高まっている現在、今後もこうした事業を通して看護をアピールしていきたいと思います。

看護局副局長　松本比登美

鳥取看護大学実習開始

8月から、倉吉総合看護専門学校に加え、新たに鳥取看護大学の成人・母性・小児看護学実習が始まりました。

病院での看護体験を通して、理論と実践、知識と技術の学びが深まるよう、教員と連携しながら支援しています。

また職員全員が学生実習を貴重な自己成長の機会と捉え、次代の看護職を育成するロールモデルとしての役割も果たしていきたいと思います。

看護局副局長　松本比登美

ワークライフバランス「カンゴザウルス賞」を受賞しました

カンゴザウルス賞は、日本看護協会の看護職のワークライフバランス推進事業に参加し、3年間の取り組みを続けた医療施設の努力と成果に対して贈られるものです。

多様化する看護師の業務の中で、主に事務的な業務を軽減するための看護師長アシスタントの導入や、職員の繋がりを深めるための職員元気プロジェクトなどに取り組みました。

この3年間の活動を次に繋げ、今後も職員が活き活きと働き続けられる職場環境をつくり、地域の皆様に満足していただける医療や看護を提供していきたいと思います。

看護局副局長　小椋美保子

◀賞状とカンゴザウルス

ワークライフバランス推進委員 ▶

お気軽にご相談ください

9月1日から「患者相談窓口」を1階会計窓口横に移設しました。あらたに専用の相談室を設置し、相談員も増員し、患者の皆様やご家族を支援する体制をさらに充実させました。

医療従事者と患者の皆様は医療知識や生活環境が違うため、言葉の受け取りかたの違いなど、ズレが生じることがあります。相談員が間に入ることで対話の橋渡しをし、このズレをなくしていきたいと思います。

患者の皆様の思いをまず聞くことから信頼関係を構築していきたいと考えています。

相談担当看護師長　小原佐智子

＜私達が相談員です＞

左から小原相談担当看護師長・医療メディエーター
槙原手話通訳・医療メディエーター

こんな時にご相談ください

- ○医療に関して不安がある
- ○医療費支払いに不安がある
- ○退院後の生活が不安
- ○疑問や不安があるが、うまく言えない、言い出しにくい
- ○医療従事者の対応が気になる
- ○医師の話を一緒に聞いて欲しい
- ○その他

とにかく何でも構いません
お気軽にご相談ください

相談時間

○平日8：30～17：00

新任医師紹介（平成29年６月１日採用）

消化器内科
細田（ほそだ）　康平（こうへい）（副医長）

［ひとこと］
出身は米子市で、近畿大学卒業後、鳥取大学医学部附属病院に所属し、六月から厚生病院に赴任しました。倉吉市での勤務は初めてですが、診療では特に消化器内科として診断・治療を行い、中部地区の医療に貢献できるように頑張りたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

（平成29年10月１日採用）

脳神経内科
田尻（たじり）　佑喜（ゆうき）（副医長）

［ひとこと］
鳥取大学卒業後、鳥取大学医学部附属病院、鳥取県立中央病院、山陰労災病院と勤務してきました。倉吉は住むのも勤務するのも初めてで、いろいろと手探りの日々です。これまでに患者さんや同僚から学んできた知識、経験を元に、よりよい医療を還元できるようがんばる所存です。よろしくお願いします。

退職者

医師

消化器内科
鳥飼　勇介（五月末付）

脳神経内科
中下　聡子（九月末付）

呼吸器内科
古岡　ひとみ（九月末付）

お世話になりました

編集　鳥取県立厚生病院　院内広報委員会
発行　鳥取県立厚生病院
〒682-0804　鳥取県倉吉市東昭和町150番地
電話　0858-22-8181(代)　ファクシミリ　0858-22-1350

厚生病院のホームページも、ぜひご利用ください。
パソコン、スマートフォンからご覧いただけます。
http://www.pref.tottori.lg.jp/kouseibyouin/